

第三百二十六回 青葉会

平成二十五年五月二十三日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 小西弘子 朱牟田惠州 豊田ゆたか 中野一灯

福島正明 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 石川清 柿崎忠彦 久米五郎太 小早健介 土谷堂哉 古田昇 南平和夫

宮内規雄 渡邊盛雄

〈紙上選句〉 赤田堅 柿崎忠彦 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎青史

山本三恵

《選者吟》

祭来(く)と前垂れ替ふる辻地蔵

万里子 (恭・恵・青)

胡桃咲く谷川べりの分校址

全 (堅・紀)

よく喋るロボツト掃除機梅雨晴るる

全 (啓・く)

女神へと卯波を渡る男神かな

全 (弘)

濠端のジヨガーら新顔風青し

全

《互選句》

☆ 蚕豆や考え事の皮の山

正明 (万・堅・猛・忠・孤・龍・啓・青

(青…スピノザのレンズ磨きを思わせる佳句)

三)

八点 脱ぎやうも真打ちぶりや夏羽織

恵洲 (弘・敏・灯・允・啓・く・亜・天)

引越しの荷ほどき半ば心太

堂哉 (忠・孤・灯・正・啓・青・亜・天)

☆ 母の日や米櫃の底擦(こ)る音

正明 (猛・孤・灯・啓・亜・三)

(隆…中七↓「決めて母の日」の方が語調整うのでは?)

盛雄 (万・忠・孤・龍・隆・允)

☆ 内定を決め母の日を祝ひけり

忠彦 (万・灯・隆・天)

四点 ☆ 痩せすぎて寸法直す更衣

孤舟 (猛・恵・ゆ・允)

夕牡丹老いねば見えぬもののあり

孤舟 (猛・恵・ゆ・允)

「廓文章」吉田屋

弘子 (紀・敏・く・天)

上方の恋をしんねり夏芝居

弘子 (紀・敏・く・天)

「京鹿子娘二人道成寺」

全 (紀・恭・恵・亜)

☆ 鐘見遣る睡(まなじり)の紅夏兆す

恵洲 (万・猛・ゆ・灯)

☆ 反抗期の上眼遣ひや若葉寒

恵洲 (万・猛・ゆ・灯)

(☆…「目」にしては?)

孤舟 (弘・恵・正)

三点 母の日や男の沽券なぞ虚し

孤舟 (弘・恵・正)

地球儀を傾げ卯波を立たせけり

全 (弘・正・青)

(青…奇抜な発想。「を」が重なるので「波を」の「を」をとった方がいい)

全 (恭・啓・亜)

茶摘女の浮きつ沈みつ日を返す

全 (恭・啓・亜)

☆ 分け入ればまだ片言のほととぎす

一灯 (万・龍・青)

☆ 栗咲くや納屋の二階のかくれ部屋

全 (恭・孤・龍)

☆ チエーンソー止み老鷲の谷渡り

全 (万・恵・允)

岡の上(さ)の社宅の小さき夏座敷

規雄 (弘・恵・亜)

☆ 菖蒲湯や葉先のふるる傷の痕

天牛 (万・ゆ・正)

☆ 夏みかん築地を越えてたわわなり

そらお (万・三)

(萩市にて)

玉三郎・菊之助の「二人道成寺」

紀久男 (忠・く)

じわがくる薄暑の舞台充ち足りて

紀久男 (忠・く)

(じわ…感嘆のどよめき)

☆ 勘團猿後継育つ端午かな

恵洲 (万・敏)

母の日も晩酌の母百近く  
 刺りあとにコロんたつぷり夏きざす  
 合奏のドラム高鳴り夏来たる  
 紫陽花や愛国主義の裏の顔  
 外苑の緑の風やフランス語  
 孫の顔どこか似てゐる武者人形  
 ☆ たんぽぽを銜へて子等の駆け回る  
 帝釈天眺むる土手の日傘かな

堂哉 (龍・ゆ)  
 ゆたか (孤・く)  
 全 (敏・隆)  
 正明 (ゆ・三)  
 全 (紀・隆)  
 昇 (隆・天)  
 規雄 (万・龍)  
 亜也 (恭・三)

穴道湖

一点

残照の揺れる湖面や初夏の風  
 初夏退院二輪の花の可憐なる  
 まゝならぬ老舗倒産新茶注ぐ  
 初夏の旅ラジオ体操加はりて  
 柿若葉みどりごとと輝けり  
 児等の声高き屋上夏日さす  
 朱く燃ゆ隣家の躑躅主は亡く  
 ひなげしの揺れてピエロの踊り出す  
 跳ね太鼓五月の雨に肩濡らす  
 青葉風高砂流るる神の苑  
 芍薬やゆつくり咲きて崩れけり  
 湯上りの浴衣身の丈道後の湯  
 幾万の薔薇も手入れ師ありてこそ  
 狐忠信六法若葉の宙に踏む  
 初鯉とあれば即ち初冷酒  
 年ともに我慢しづらく著莪の花  
 佳き酒に辛味なめ味噌花菖蒲  
 みちのくのみちさまよえばみどりさす  
 葉隠れに石かと紛ふ墓動く  
 若竹や地下水脈を探り当て  
 歳時記のページをめくる若葉風  
 病室の実感わかぬ金婚式  
 菖蒲田の名残の園に風そよぐ  
 ☆ 歩道橋たまさか登れば椽の花  
 我が家では八十年振りの鯉幟  
 妹来たる匂ふ芍薬胸に抱き  
 黙阿弥の末裔悼む真夏日に  
 酔味噌和え今宵対面蛍烏賊

そらお (允)  
 清 (紀)  
 紀久男 (正)  
 全 (弘)  
 猛 (允)  
 恭延 (青)  
 忠彦 (敏)  
 孤舟 (灯)  
 五郎太 (く)  
 全 (猛)  
 全 (敏)  
 弘子 (天)  
 健介 (忠)  
 恵洲 (紀)  
 全 (堅)  
 ゆたか (堅)  
 全 (紀)  
 全 (忠)  
 一灯 (正)  
 正明 (猛)  
 昇 (ゆ)  
 和夫 (紀)  
 亜也 (堅)  
 全 (万)  
 全 (隆)  
 天牛 (隆)  
 全 (恭)  
 全 (隆)  
 ? (堅)

● 次回青葉会

六月二十七日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)  
 ▲ 当季雑詠五句 投句二句  
 七月二十五日(木)  
 八月二十二日(木)

平成二十五年五月句会報

一 今回は先生以下12名出席。投句は30分間だけ顔出された五郎太さん含め10名。御覧のように正明さん、恵洲さん、堂哉さんが高得点（正明さんの九点句の内六点が紙上選句という異例）でした。

先生お手製のベトナム風サラダ、弘子さんからの土佐「黒潮饅頭」、そして正明さんからの純米「遊佐来」（山形の杉勇蔵岡酒造）、恵洲さんの「多満自慢」（純米大吟醸）、星田啓子さんからのギリシヤ赤ワイン「AGATHON」（岡田哲也さんが代表の有機食品バイジョイが輸入元）を賞味。よく飲み食いし清さんの病状、株式相場暴落、三浦雄一郎のエベレスト登頂。茂木経済産業相、阿川佐和子等々を話題にしつつ閉会。

二 関係者近詠

下校子の道草母へ蓬摘み 万里子 春眠に手足遅れて醒めにけり 丹野敦雄  
芽吹く枝に栗鼠の居眠り恋疲れ 全 1「俳句」六月号 小笠原和男選  
主治医へと摘む庭先の蕨の藁 全 1「NHK俳句」六月号 岩岡中正選 規雄

吉祥寺本町

路傍に逃水ならぬ供花積まれ 全 地産地消ポスター掲げ里若葉 恵洲  
溜まりたる不義理果たさん水温む 眞希子 1五月放送NHKラジオ西村和子選（兼題「若葉」）

自閉児の強きうなづき風光る 全 一枚の植田の芯に驚佇てり 允章  
この店もこの代限り白木蓮 全 麦秋や文字かすれたる道標 全  
選挙公約よりさへづりへ耳動く 全 葉隠れに梅あをあをと太りけり 全  
異国の字のコンテナ過ぐる鳥雲 弘子 奥多摩は雨後極上の若葉して 恵洲

ブランコの少女交互に空へ出る 全 打連れて浪速七坂弥生尽 堂哉  
よれよれと愛し初蝶なればこそ 全 幸村の無念の坂や花の雨 全  
鼈甲色に古りし輪ゴムや三月尽 全 織田作の下駄のからころ春の坂 全

満開の桜トンネル人流る 恭延 芸大に八百年の楠若葉 紀久男  
春富士や雲の上より容姿出す 全 祇園から女将お伴に夏稽古 全  
春の雲空の真中悠然と 和夫 幸四郎の弁慶 全

四季報を片手に株価花の冷 忠彦 感情過多泣く弁慶の汗まみれ 全  
昆陽（こや）早春草城句碑のひっそりと 紀久男 涼しさも三日坊主の山籠り 小松義人  
1「萬緑」六月号 1 骨切りのしやりくと梅雨明ける 全

校門のおとこ先生風光る 丹野敦雄 南瓜も小型になりて国ちむ 全  
1「俳句」六月号 嶋田麻紀選

三 万里子先生より二月句会の添削：掲載遅くなりましたが抜粋して御紹介します

市川團十郎追悼

○還らざる寒の大河や巨星落つ ゆたか ↓ 還る無き寒の大川成田屋亡し

（巨星落つ||巨星墮つ。新聞の見出しのようなので避けたい）

○春の瀬戸赤を極めて夕陽落つ 健介 ↓ 赤光（シャククワウ）を極めて瀬戸の春没日（イリヒ）

○春暁の光走るや風の上 忠彦 ↓ 早春の曙光さ走る風の果て

○料峭や透明ころもの無縁仏 盛雄 ↓ 料峭や無縁仏の衣透き

○イカナゴで夜なべの女房楽しそう 堅 ↓ 鮎子を嬉々と煮る夜の妻若し

（夜なべ||秋の季語）

六月十四日

紀久男記